

# ラオスのこども通信 23号

2001年12月発行



学校図書室のオープンに集まった子どもたち

<ラオス便り>

## スワンモン小学校のCCC

野田幸枝



ラオスの今をお知らせするラオス便りを今号より連載します。第1回は留学中の野田さんです。

センケオ先生は学校の先生が天職という感じですが、土曜日は、午前はASPB事務所のCCC(子ども文化センター)で工作を教え、午後はスワンモン小学校CCCで教えます。

ある日、先生はASPB事務所で初対面の私に「日本語を教えてください、子どもたちが勉強したがつているんだ」。私は勢いにつられてスワンモンへ。今では毎週末、通っています。

日曜日の朝9時前、小学校に着くと、サッカーをしている子どもたちに迎えられます。絵のコンセン先生が現れると、寺でチャンパーの木を描こうということに。立派な木が何本も立って、その向うにはたくさんさんの蓮の花を咲かせた池が光を浴びていました。ここでは子どもが中心になって、大きい子も小さい

子も一緒に歌や踊り、お遊戯やサッカーをしています。日本語の勉強は、単語を言う練習をしてひらがなを1日10文字ずつ教えます。

センケオ先生のことは東京事務所によく話題に出していました。毎週大きな車に子どもたちを大勢乗せてASPB事務所のCCCに通ってくる熱心な先生がいるということ。その先生が自分の小学校にCCCを設立するにあたってどのように支援するかと。

1本の木からおちた実から新しい芽が出るように、ASPBの活動が広がっていくことに喜びを感じます。ASPBとセンケオ先生が出会って、今私はスワンモン小学校の元気な子どもたちに出会えて本当に良かったです。このような出会いが、子どもたちの笑顔が、ラオス中に広がっていきますように。

## その人なりの、 たとえば、こんなASPBとのつながり

今号は、ASPBをつくる人々の声を紹介します。前号では専従スタッフが登場しました。ASPBは、この他、本業を持ちながら事務局を担う非専従スタッフ、ボランティア、様々な専門家で成り立っています。例えば今号のニュースレターには実に多くの人の名前が登場します。まさに人の手によって作られるのがNGO活動。あなたもASPBをつくる人になりませんか。

### ASPBの活動に参加して

#### 鳴海加奈さん



##### (1) 参加のきっかけは？

会社の企画で絵本のラオス語貼りのボランティア募集があり、面白そうと思って参加。数か月後、この貼り付けた絵本をラオスへ持って行きASPBの活動を学ぶ社内研修(スタディーツアー)にも参加する

ことに。

##### (2) どんな活動に参加している？

まだ参加歴1年未満で、イベント応援が多いです。ラオス料理作り(春巻き、揚げバナナ、カボチャのお汁粉)と販売。留学生達とおしゃべりしながらの料理教室みたいで楽しかったです。

##### (3) やってみたいの感想は？

ASPBは、視線をラオスだけに向けていない所がいいなあと思っています。企画に参加する日本人が常に何かを感じ、笑顔で帰って行くような雰囲気がいいですね。視線が日本とラオス両方に向いていることは、ボランティアが長く続けている理由にもつ

ながっているのだらうと思います。多くの留学生が毎年応援に来てくれるのも素敵なことですよ。

##### (4) これからやってみたいこと

何事も今の自分にできることから始めていきたいと考えています。ASPBやラオスを通して、物事を色々な角度から考えられるようになりたいですね。まずはラオス語に挑戦します。

##### (5) 最後に一言

日本人にとって、「ボランティア」という言葉は重く感じてしまうような気がします。でも、やってみたら「こんなのでいいの？」って思えるのでは。ちょっとでも興味があったら、連絡してみるのはどうでしょう。きっと笑顔で対応してくれますよ。

#### ペッカイソン アノンデットさん

##### (1) 参加のきっかけは？

先輩から誘ってもらいました。そこでラオスの子どもたちのための活動を聞いて、面白そうだし、一方で日本人と日本語で



話し合う機会ももっとあるじゃないかなあと思いました。

##### (2) どんな活動に参加している？

一番楽しかったのは、麻布十番でラオスの料理を作って売ったことです。



国際協力フェスティバル  
(10月6、7日。日比谷公園)

今年の国際協力フェスティバルでは、ラオス人留学生たちが、ブースや識字ワークショップの運営に協力してくれただけでなく、ステージでラオスの伝統舞踊を披露しました。さまざまなラオスの民族の伝統衣装に身を包み、華やかにステージで踊る姿はとて好評でした。

(3) やってみての感想は？  
まだあまりやっていないので、よくわかりません。

(4) これからやってみたいこと

これからも私は勉強をしながら、ボランティア活動を続けたいと思います。(今は東京の留学生会館にいますが)高専へ行ってからは、(地方都市なので)遠くて、どうなるかまだ分かりません。けれども、できるだけやりたいと思います。



麻布十番納涼祭り 国際バザール (8月24~26日。港区一の橋親水公園)



### 塩谷光さん

(1) 参加のきっかけは？

ピーマイパーティーに一般客として、楽しくて参加させて頂きました。その際、ボランティアの方たちも楽しそうなのを見て、興味を持ちました。

(2) どんな活動に参加している？

初めて東京事務所に行った際、絵本200冊運動で絵本に貼りつける翻訳セットのコピー原紙を手軽に取り出す方法を思いつき、整理を始めたのが最初でした。また、車を持っていたので、沖電気さんの120周年記念ボランティア体験「ラオス語の絵本をつかってラオスに送ろう！」や、8月の麻布十番納涼祭りでは搬入、搬出を兼ねて参加しました。10月の国際協力フェスティバルでは、ラオ・コーヒーを販売しました。

(3) やってみての感想は？

一番印象深く思い出されるのは、麻布十番納涼祭り。ラオス料理の売上を伸ばすという一つの目標に対して、初対面を含む大勢の人が、国籍、性別、世代の違いを越え、一丸となって素晴らしいチームワークを発揮しました。これは普段の生活には無い、貴重な体験でした。

(4) これからやってみたいこと

93年と95年に「みつめ遊戯団」を組んで、演奏したり、踊ったり、劇をしながらラオスとベトナムを回ったそうです。7年ぶりくらいに「みつめ遊戯

団」を再結成して、みんなで作った大きな紙芝居をCCCの人たちに協力してもらって、上演して回りたいですね。

(5) 最後に一言

NGOに参加しているというよりは、サークル活動のノリに近いので、楽天的に見えるかもしれませんが、これからも宜しくお願いします。

### 敦沢美枝さん

会を知ったのは10年ほど前、国際ボランティア貯金の助成団体リストからです。母親になり、子どものことに関心を持ち始め



たときでした。興味を持ちながら、実際に会に携わる機会を得たのは2年前のことです。

長男がチャントソンさんのお子さんが卒業した小学校の5年生で、PTAの委員をしていた私は、チャントソンさんを招いて、5年生の子どもたちへの講演会を企画しました。子どもたちは、彼女の話すラオスの様子を大変興味深く聞いていました。他の国の話を伝統工芸や民族衣装を見たりしながら直接聞くことで、世界を身近に感じるということ、自分たちより貧しい国の子どもたちの生活を知ることの大切さを目のあたりにしました。と同時に、全てを純粹に吸収していく子どもたちのパワーを感じました。何かしたいという子どもたちの声もあり、絵本を集め、子どもたちと翻訳シールを張る作業も行いました。それ以来、通信の発送や入力作業の手伝い

をしています。

今年も、同小学校で子どもたちとの活動が進んでいます。発送作業には多くのお母さんが関わってくれています。とてもうれしく思っています。それらの活動がラオスの子どもたちへの支援とともに、日本のふつうの子どもたち、お母さん達が「世界」という考えにふれる機会になってくれたら、そう私は思っています。

### 工藤政則さん

「ラオス」と「子ども」。このキーワードに惹かれて活動に加わり3年目になります。

主にイベント時の実行委員として活動しています。事前準備や打ち合わせ等をしっかりと行い、当日の現場の進行をいかにスムーズにできるかにやりがいを感じています(笑)。たくさんのボランティアや留学生との協力で成功したときの感動はもうたまらないものがあります。その後飲むビールのうまいこと、うまいこと…(いや、失礼)。

こうした活動の意義は大きく2つあると思います。



1つはなんと言っても、ラオスの子どもたちに生かされていること。それは現地へ行くと良く分かります。わたしがヴィエンチャンASPBを訪れたときのことで。午前中に近所の5歳くらいの女の子が1人でやって来て、



大田ふれあいフェスタ(10月13、14日。平和島)

1冊の絵本を手に取り、声を出して読み始めたのです。たどたどしくも、1文1文をしっかりと読むその姿を見て、「わたしたちの活動の原点はこれなのだ!」と確信しました。ラオスのすべての子どもたちが、こうして自由に本を読めるようになったら、と思いました。

そしてもう1つは、わたしたちボランティア自身が、他ではできない経験をして、自分の人生を豊かにできることです。留学生も含めて様々なメンバーとの交流は楽しく、またとても良い刺激となって私生活に生きています。

今後も新しいことに挑戦する気持ちを忘れず、ラオスの子どもたちと一緒にわたし自身も成長していけたら、と考えています。

## ASPBの活動を支援して

### Q: 寄付のきっかけ

- 新聞記事を読んで。読み聞かせの楽しみを共有したいと思った。
- アジアが好きで、恩返しがしたくて。
- 保健医療の仕事でラオスを訪れて。

### Q: ASPBの魅力

- 絵本という視点。
- 「できるときにできることを」というスタイル。

### Q: その他

- 通信は、もっと簡潔に。
- 組織が充実しても原点を忘れずに。
- 「小さな善意の積み上げ」が「争い」や「憎しみ」

によって一瞬のうちに崩れさることがない世界になってほしい。

(寄付をしてくださった方へのアンケートから)

NGOは人の手によって作られる活動。そして思うのは、もっと人の力が集まれば、もっと中味の濃い、もっと面白いことができる、と。ASPBは、もっと、もっと、人の力を集めたいと思っています。事務作業、パソコン入力、発送作業、広報、企画など、仕事はいっぱいあります。ASPBをパワーアップするアイデアと実行力とともに参加する方、そして資金集めの得意な方も大歓迎です。

## プロジェクトの進行状況 9月～11月

これまで各地の小学校などに配付してきた図書箱・袋に、図書を補充するための「図書補充費」のご支援を、前回の通信22号で緊急募集しました。9月～11月の間に合計8件17口、255,000円の指定募金を頂きました。早速、11月にルアンパバン県での図書補充に使用させていただきました。本当にありがとうございました。

### <読書推進>

#### ◆図書袋の製作・配付

11月20～21日：サワンナケート県の40校に、1校あたり2袋配付

#### ◆図書の補充

指定募金でのご支援を合わせて、合計130校へ、下記の日程で図書補充を実施

11月8～9日：ルアンパバン県

11月20～21日：サワンナケート県

1月15～16日：シェンクワン県

#### ◆学校図書室 (Hak Arn) の開設

9月：小学校4校 中等高等学校1校

10月：小学校2校 中等高等学校2校

職業訓練センター1校

11月：中学高等学校5校

合計15ヶ所で新規開設

#### ◆既存の学校図書室55ヶ所へ図書補充

現在準備中 3月までに完了予定

#### ◆教員養成校における読書推進セミナーの開催

10月15～18日：カンカイ教員養成校

12月に3校で実施し、全学校での実施を完了予定

### <子ども文化センター (CCC) >

#### ◆全国6ヶ所のCCC運営費を支援 (継続)

#### ◆全国11ヶ所のCCC図書室への図書補充

### <専門家派遣>

#### ◆調査プロジェクト

9月5日～14日：田島伸さんを派遣し実施

#### ◆紙芝居プロジェクト

2月下旬：やべみつのりさん、長野ヒデ子さん、堀田穰さんを派遣し実施予定

### <出版>

#### ◆印刷完了 (11月)

『Lao Animal Story』

ラオ語版10,000冊 英語語版3,000冊

出版支援／東京国際交流財団・キッコーマン株式会社

#### ◆出版準備中の図書

民話絵本 3点

創作絵本 1点

再版 (改訂版) 5点

翻訳 1点

## ラオスの物価調査

	ヴィエンチャン	サイヤブリ
もち米 1kg	2,500	2,000
牛肉 1kg	20,000	15,000
ナムパー 1ビン	6,000	7,000
砂糖 1kg	2,500	3,500
コーラ 1本	2,000	3,000
ガソリン1リットル	2,988	3,000
ボールペン 1本	2,000	2,500

単位：KIP (1円=80kip) 2001年9月調査

ASPBでは、各子ども文化センターのスタッフを通じて物価についての調査を実施しています。その中からいくつかを紹介します。

首都のヴィエンチャンでは、主食であるもち米をはじめとした農産物や肉類は、地方に比べて高くなっています。逆に、サイヤブリなどの地方では、ナムパー (魚醤) や砂糖などの調味料の値段が高くなっています。これらの「製品」は、ほとんどがラオスで生産されておらず、タイから輸入されているため、距離の遠くなる地方では、値段が高くなるのだと思われます。同様にサイヤブリのような地方では、学校で子どもたちが利用するボールペン (ラオスではボールペンの方が鉛筆よりも流通しています) 1本が、お米 1 kg よりも高いという状況があります。

## 紙芝居の取り組みと動き

### ■「紹介」から「普及」へのステップ

これまでASPBでは、紙芝居作りワークショップや作品の出版などを通じて、ラオスでの紙芝居の可能性に手ごたえを感じてきました。私たちは、紹介の時期から普及の段階へと進んでいくことをめざしています。とはいえ、「ワークショップのときはものすごく盛り上がる。でも、ラオスの人たちが自分たちで作品をつくっていくという状況には、まだなっていない」というのが現状です。これに対してラオスの隣の国、ベトナムでは、紙芝居への評価が高まり、普及が進んでいます。これは教育関係者や出版社にキーパーソンがいることが大きな力となっているようです。熱い思いを持った作り手・演じ手がいること、そうした人物を発掘すること、そして的確な支援をおこなうこと。人々の手によって紙芝居が広がっていくには、これらが必要です。

### ■ラオスで紙芝居が動いている

キーパーソンを探せ、ということで私たちが注目している人々があります。パデック (PADECT) というラオスの団体の紙芝居のプロジェクトを担当しているチャンサモットさんとボアチャンさんです。彼らに、ASPBの仲間のあさぬまちずこさんがインタビューをしています。

「学校教育の中で、子どもが興味を持てる活動が少ない。それが学校離れにも影響している。教師の力不足を指摘する声は多いが、彼らなりに可能な方法を探している。しかし、教材をそろえることは難しく、本さえもまだまだ普及率が低い。そこで、低価格、少ない数で子どもが楽しめる、持ち運びに便利、セミナーで教師が習得できる、子どもの興味が高い、

これらの条件を満たす活動として紙芝居が最も適している。自分たちの活動は、車で山の中を移動しながら行っている。そのため耐久性を高めて、どこでも入手可能なダンボールに紙をはり、ビニールテープで補強した紙芝居を用意している。絵本をもとにして紙芝居を作り、セミナーを開催して普及している。セミナーでは作成方法だけでなく、紙芝居の意義を伝えるよう努力している。現在では活動に積極的に参加し、紙芝居作成にかかわっている学生もいる。子ども達の反応が高いため、教師や父兄の関心も高まり、活動は広がりがつつある。まだオリジナル作品を作っていないが、特にラオスの民話やお話を題材にして独自のものが作れるようにしたい」

こうした人々と連携し、オリジナル作品づくりに向けた展開をしていきたいと考えています。

### ■2002年2月「紙芝居ワークショップ」を実施

ASPBでは、2002年2月に「紙芝居ワークショップ」を計画しています。今回は、紙芝居作家のやべみつりさん、長野ヒデ子さん、紙芝居の研究者の堀田穰さんとともに、ひとつはサイヤブリのCCCで、もうひとつはヴィエンチャンの教員養成学校で行う予定です。紙芝居が広がるには、演じ手を増やすこと。それには、現状では作品の数が決定的に少ない。学校の現場で教材として手づくり紙芝居の導入を促そう。そうしたことから、これらの2拠点で実施します。教員養成学校においては、現在ASPBは読書推進をテーマにした研修も行っています。先生の卵が、読書と紙芝居の理解を深めることで、普及が高まっていくことを期待しています。

(紙芝居ワークショップは住友財団の支援を受けています)



「まいごのお星さま」



「カバンはだれのもの？」

## <日本のコンクールで入選> 「手づくり紙芝居コンクール」で新人優秀賞に

11月25日、神奈川県立図書館で行われた第2回「手づくり紙芝居コンクール」(紙芝居文化推進協議会)で、ラオスからの作品が入選しました。このコンクールには、5歳から70歳まで約150点の応募があり、ラオスからは5作品が出されました。その中で、サイヤブリCCCで図画などを担当しているスタッフのウティ・シリボンさんの「まいごのお星さま」が新人優秀賞を取りました。ス

トリー-の展開がダイナミックであるとの評価を得ました。他の応募作も各地のCCCの講師や子どもたちによる作品です。

「手づくり紙芝居コンクール」は、以前ヴィエンチャン事務所のスタッフが日本で研修した際にもラオスの紙芝居を上演しています。

このような機会は、ラオスの人々の作品づくりの意欲をさらに高めていくことでしょう。

## <応募作品>

### 「まいごのお星さま」

お母さん星と子どもの小さい星が空を散歩していると、強い風で離ればなれになって、小さい星はまいごになってしまいました。月のおばさんや太陽のおじさんに道を聞いてお母さんを探し、地球のおじさんのところでは雷が落ちて怖い目に会います。虹のお姉さんには、もうすぐ夜になることを知らされ、やがて空が暗くなると、遠くの方から「小さい星やーい」と呼ぶ声が聞こえ、お母さん星の姿が見えて、お母さん星は小さい星を抱きしめました。

### 「カバンはだれのもの？」

うさぎさんは、道にカバンが落ちているのを見つけました。持ち主を探して、にわたりのばさんの家、ぶたのおばさんの家、おおかみの家と訪ね、落とし主のおじさんに会います。おじさんはお礼に、おいしい料理やケーキをごちそうしました。この作品は紙芝居の読み手が聞き手の子どもたちに「ここはだれの家だと思う？」と問いかけていくのが特徴です。

### 「きたない子グマ」

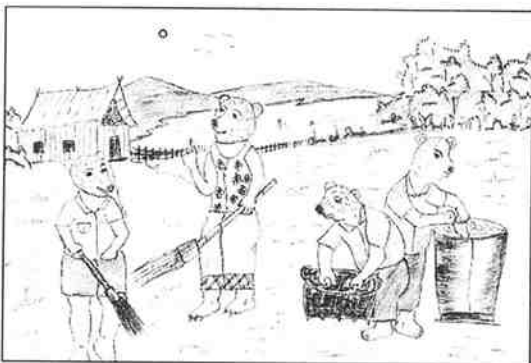
川のほとりに、お母さんグマと3頭の子グマの一家が住んでいました。子グマはあちこちに食べ残したものを捨てたので川は汚れて、ハエやボウフラがわきました。手も洗わずにごはんを食べたので、ある日子グマはコレラでお腹が痛くなりました。お医者さんはお母さんに、ゴミや腐った食べ物にとまったハエがバイキンを運んで、お腹をこわしたのですよと話しました。お母さんは、子グマたちに、家の前、家の中、食器、なべ、洋服をきれいになさい、ゴミはカゴに捨てて、ごはんを食べる前と後、手を洗わなければいけないよと教えました。それからは、子グマの家族は病気にかかることなく、幸せに暮らしました。

### 「子ジカ」

ある日、子ジカは散歩をしていると、楽しくて夢中になっているうちに、お母さんとはぐれて、まいごになって、深い穴の中に落ちてしまいました。ちょうどその時、ケオさんが通りかかって、藁で輪を作って、子ジカを引き上げました。いっしょにお母さんを探しに行きました。お母さんのもとに戻った子ジカは、幸せそうに野原でやわらかい草を食べました。

### 「森を焼かないで」

きのこを探しに森へ行ったトウイは、大きいトカゲとアルマジロを見つけました。チョーイを誘い、2人は森に火をつけて捕まえることにします。音を立てながら森は燃え、動物たちは急いで逃げました。火がおさまると、2人はトカゲとアルマジロを探しますが、見つからず、けんかになりました。家に帰り、お母さんからは、動物のすみかがなくなると怒られ、今度は一緒に木を植えました。動物たちはとても喜びました。



「きたない子グマ」



「子ジカ」

## 識字の実践から

田島伸二さん (ICLC国際識字文化センター)

ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) で約20年にわたってアジア地域の図書開発や識字事業に携わった後、1997年から3年半、JICA (国際協力事業団) 初の識字専門家として、パキスタンの首相識字委員会に赴任した田島さん。豊富な識字の実践についてお聞きしました。

### ■紛争地帯で、共同で絵本をつくる■

インドとパキスタンで紛争が続くカシミール地方。ここを題材に、現在、両国の共同出版の絵本づくりなどに取り組んでいます。パキスタンの国家予算の大部分が軍事費で、教育や社会開発への配分は非常に少なく、隣国インドも同様です。独立以来の紛争の解決は子どもたちの未来に大きな課題です。50年間、憎しみが助長される中、子どもたちに何を伝えることができるのでしょうか？

1998年、インドのニューデリーで開催された国際児童図書評議会 (IBBY) の「平和」をテーマにした講演でカシミール国際平和絵本の共同作成を呼びかけ、多くの賛同を得て共同制作プログラムが開始。2001年には東京で5か国が参加して素案が完成しました。

ヒンドゥー教とイスラム教の子どもたちが仲良く暮らしていたカシミールで独立を契機に国境線が引かれ、その領有をめぐる3度も大きな戦争を起こし、現在は核兵器が対峙するという深刻な状況を描き、子どもの成長をもとに相互理解へとつながっていく展開とし、作品中の詩には曲をつけ、両国の歌手が歌うことになっています。絵本が世界を変えられるか？メッセージは文字や絵と同時に美しい詩や心に響くメロディとしても伝えていくことが重要です。子どもにとって、問題に直面したとき、あらゆる表現行為で伝えることが重要だからで、識字とは読み書き計算能力だけでなく、人がこの世界をお互いに理解し共感しあうために作り出す、豊かなコミュニケーションの力として考えるべきなのです。

### ■寺子屋式の学校での識字活動■

——数字からは見えない識字の実態

1998年当時、首相識字委員会はフォーマル(学校教育)教育ではなくノンフォーマル(学校外)教育での識字教育を進めており、私はアドバイザーとして子どもと大人を対象とした識字教育に携わりました。

フォーマル教育の実質の中途退学率は約7割と非常に高く、それを補うためノンフォーマル教育の寺子屋式の小学校が全国に約7000校設置されていました。実態調査をすると、ゴーストスクールの存在が明らかになりました。書類では存在しても村にはなく、しかし給料は支払われていました。視察に行くことを事前に伝えると、他の学校の生徒が集められ、あたかもきちんと運営されているように見せられることもありました。委員会と相談して、運営を地方政府から地元の民間の組織に切り替えたこともあります。

一方、ほとんど教材のない山奥で一生懸命二十四の瞳を教えている女教師たちに会ったときには心から感激しました。半年以上も給料が払われていないにも拘わらず、誠心誠意子どもたちを育てている教師です。パキスタンでは二十四どころか2400万の瞳が存在するので大変です。公式の識字率は47%ですが、地方で調査したら実態は20%以下。5%未満の地域も。測り方が曖昧だったり、恣意的な計算もあったのです。

——貧しい人々が講師となる紙づくり

寺子屋学校では、決まって子どもたちから「ノートが欲しい」と要請されました。低学年は書いては消す石板などを使いますが、3～4年生は書き残したいという欲求から、ノートが欲しくなるようでした。紙は高価なので、サトウキビの残滓やバナナの幹や葉を使い、自分たちで紙を漉く方法を教えました。NGOの強化を目的に2年間で約1500人に紙漉き研修をしました。少数民族の村おこし、農村女性やハンディキャップを持った子どもの自立、中東への輸出など活動が広がりました。

紙づくりの知識や技術は、一部の人に寡占させず、多くの人々に開放し、ワークショップに参加した役人や教授には、学校を出ていない貧しい人々を講師役としたことが人々の自信につながったと思います。



コンピュータ社会でも紙が教育の本質を担うことを学び、大きな収穫となりました。

#### ——政治家に利用されない識字教育

寺子屋学校を増設することになり、ある有力政治家は出身地に集中的に約200校の建設を提案しました。「他に必要としている貧しい地域に建設すべきではないか」と強く進言しましたが、計画を断行。教育大臣は式典で、核技術の進展を助けるとの趣旨から識字教育を称えました。

識字教育が地方の政治家や国際政治に利用される危険を強く感じ、ヒューマン・リテラシーという人間としてのありかたを求める新しい識字理念を21世紀に形成することが重要だと思うようになりました。識字とは、人間が幸せになるために必要な知識や情報を身に付けるもので、人々を対立させたり嘆き悲しませるためではないことを痛感したのです。識字教育は人間を向上させる目的をもつことが必要です。

#### ——刑務所の中の子ども達に識字を！

刑務所の子どもの実態を知ってほしいと、社会福祉省の女性から刑務所に案内されたことがありました。子どもの数は極秘でしたが、全国に7千人、その刑務所には約200人で、大人の替え玉や冤罪の子も少なくなく、獄外の知識や情報に飢えていました。人権を振りかざしてもシャットアウトされるので、まず、育ち盛りに狭い牢獄で暮らす子ども達のために、クリケットやバドミントンの道具の寄付から始めました。

次に刑務所側の信頼を得るため、「新聞紙を使った紙づくりワークショップ」を行いました。子ども達は、できあがる美しい紙に目を輝かせて熱中し、社会に出た後の仕事として希望を感じたようでした。子どもたちは本を読みたがっており、パキスタン初の刑務所内子ども図書館を設置。建物は30人にのぼる善意で建てられ、蔵書はすべて個人や出版社から寄付されました。

——学校に行けない子どもたちのための識字絵本  
ノンフォーマル教育用に絵本、6言語の紙芝居、創作読み物、女性による村づくりの布によるチャート

など十数点制作・配布し、使う人のための研修も行いました。



絵本は画家や子どもとの共同制作で、子どもの夢、空想的な話、悪徳地主を倒す昔話、環境問題を絵地図で描いたインダス川など、視覚的にも創造的で子どもたちが文句なしに喜べるよう心がけました。大人の価値や知識の押し付けでなく、リラックスし、想像力で自由に飛び跳ねる絵本という精神的な糧がなによりも重要です。3万部刷り、擦り切れるほどに読まれて全国の子ども達に大きな影響を与えたようです。

伐採によって砂漠化した山を子どもたちがよみがえらせていく物語を紙芝居にしたところ、イスラマバード近くのアフガニスタン難民キャンプの学校では生徒たちが木を植え始めました。知識が形になったのです。大人社会を凝視し、自分たちに何ができるか真剣に考えている子どもたちに大きな可能性を感じました。

#### ——シルクスクリーンの「布芝居」を作る

農村女性の自立のため、7枚の布にシルクスクリンで印刷した布芝居も作りました。「現在の村の様子」、「5年後に状況が悪くなった村と良くなった村の様子」などが描かれ、めくって説明しながら女性たちが村の発展について自由に議論します。ブラジルの識字の実践家パウロ・フレイレの思想と同様に、現実を把握し、改革することを目指しつつ、保守的な地盤に配慮して作りました。「女性がエンパワーメントした（力を付けた）後」と「エンパワーメントしていない状態」、「知識を得たあとの村」などが克明に描かれ、生活の向上と自立に識字が何を出来るのか、女性たちが考えていくきっかけをつくることができました。（構成：森透）

\* \* \*

識字は人間性の向上のためという田島さんの理念は、現在、対立が続く世界にあって再確認されるべきだと思います。困難に直面しながらも識字教育を通して平和を目指す田島さんの熱意と温かみが伝わってくるお話でした。（記録担当：座波圭美）



## 9月11日に起きた事件と その後に対するASPBの動き

9月11日にアメリカで起きた事件からすでに3か月が過ぎていますが、これまでのASPBの動きについて報告します。

アメリカが報復攻撃としてアフガニスタンへの空爆を表明し、日本政府もそれに協力する姿勢を示した9月、ASPBが参加している教育協力NGOネットワーク（JNNE）の有志とともに、以下の声明文の作成に取り掛かり、ASPBはこれに団体として賛同をしました。声明文は日本およびアメリカ政府関係者、政党、マスコミ関係者などに届け、また、10月に東京の日比谷公園で行われた国際協力フェスティバル会場のASPBブースでも掲示して意思表明し、JNNE声明に賛同する他の団体にも同様の掲示を呼びかけました。

ASPBが1982年からラオスの子どもたちへの教育支援をはじめた経緯。それは、ラオスがベトナム戦争に巻き込まれ、内戦が行われて、多くの難民が出たことと関わっています。人々が難民となるのは生命の危険から逃れるためばかりではなく、生まれた国に劣等感を抱いて国を去る人々も少なくなかったのです。生まれた土地で誇りを持って生きる。それには子どもたちの教育こそが重要であると考えたことが、今日のASPBの活動につながっています。またラオスはアメリカによって9年の間、猛烈な空爆を浴び、その爆撃機は日本の基地からも飛び立ちました。今なお、ラオスの人々は不発弾の危険の中で生活しています。同じ過ちを繰り返してはならないという思いが私たちにはあります。と同時に、国際社会の平和の脆さ、国際機関やNGOの無力さを思い知りつつ、しかし平和の担い手を育てるのは教育であると改めて認識し、今号掲載の田島さんをはじめラオスに留まらない様々な取り組みと連携していきたいと考えています。

今回の賛同をはじめ、ASPBの意思決定は運営会議で行われます。今回の場合は、迅速な対応が必要だったため、事務所にいた事務局スタッフ、ボランティアの6名で検討しました。毎月第2日曜日（原則）に行う運営会議は事務局スタッフ、ボランティアの他、どなたにも開かれています。

### <教育協力NGOネットワーク 声明文>

2001年9月11日、アメリカ合衆国で一般市民を巻き込んだテロ行為により、想像を絶する多くの人々が命を失いました。私たちは、平和な日々の暮らしを望む生活者として、亡くなった方々に哀悼の意をささげ、遺族の皆様にお悔やみ申し上げます。このような事態は、決して繰り返されることではありません。

日本国内閣総理大臣・小泉純一郎氏は、2001年9月臨時国会所信表明にて「テロ撲滅への闘いを開始する」ことを宣言しました。私たち地球市民として途上国の教育に協力してきたNGOは、もとよりいかなるテロにも人権侵害にも反対します。だからこそ軍事的報復ではなく、国際法に基づく犯罪者の処罰を求めます。

日本政府は、新たな難民を生むアメリカによる軍事的報復行為への自衛隊派遣という形での協力をするのではなく、戦闘による難民を生み出さないための努力をすべきです。私たちは軍事的報復によってテロを撲滅することは出来ないと考えます。報復は報復を生むだけであり、一般市民を巻き込む戦争には反対します。

テロの背景には、テロリストの登場を許してしまいかねない途上国の貧困問題や社会的差別があります。それをなくすためには教育の充実が欠かせない有効な手段であると考えます。同時に、異なる文化への無知・無理解によるいわれない敵視もまた、なくしていかなければなりません。

私たち教育協力を携わるNGOは、そのための教育が世界で行われることこそが、憎しみと殺戮の根を絶やす道であると確信し、その実現に向けて努力し続けます。

2001年10月2日

呼びかけ人  
教育協力NGOネットワーク（JNNE）有志

## 事務所の動き

### 東京事務所

#### ■ 9月

- 3日 ACAーアクアで事業打合せ (小川・赤井)
- 10日 運営会議
- 15日 キャノンで、「チャリティ・ブックフェア」のための本整理手伝い (小川・赤井)
- 18日 ワールドカルチャーキャラバン打合せ (小川・赤井)
- 21日 「手づくり紙芝居コンクール」拡大実行委員会に出席 (近藤)
- 25日 ラオス大使館へ麻布十番納涼まつり国際バザールの報告 (チャンタソン・バリマ・赤井)

#### ■ 10月

- 1日 『ラオスのこども通信』22号発送作業
- 6～7日 「国際協力フェスティバル」に参加
- 13～14日 「OTAふれあいフェスタ」に参加
- 15日 「南」の子ども支援NGO強化委員会に出席 (野口)
- 19日 ミクプランニングと事業打合せ (野口・赤井)
- 21日 運営会議
- 24日 「南」の子ども支援ネットワーク会議に出席 (野口)
- 29日 大田区ボランティア貯金推進協会総会にて活動報告 (野口・近藤)
- 30日 JICS意見交換会に出席 (小川)

### ラオス事務所

#### ■ 9月

- 1日 Mr. Alexander Willis事務所訪問
- 5日 教員養成学校セミナーについて関係機関と打合せ
- 6日 スタッフ月例会議
- 9日 サウンナケートの小学校教員4人事務所訪問
- 10日 Mr.Takatsugu Hyodo事務所訪問
- 17日 ヴィエンチャン県教育局へ打合せ (Somphet・Bounthan)
- 18日 Mr.Paul Bloxham事務所訪問
- 25日 Ms.Veera Inthavong事務所訪問

#### ■ 10月

- 4日 スタッフ月例会議
- 22～25日 PADECTの読書推進トレーニングコースの開催に協力
- 24日 Mr. Takaaki Toya事務所訪問

## 「子ども文庫」利用者数


9月：利用者のべ670人 図書の貸出のべ63人 新規登録53人  
10月：利用者のべ611人 図書の貸出のべ79人 新規登録22人

現地事務所には「子ども文庫」という図書室が併設されています。昼休みや放課後を利用して来る小中高生たち、おにいちゃんやおねえちゃんに連れられて来る学校に上がる前の小さな子、さらには近所のおじさんまで、幅広い人々に毎日利用されています。

9月は新学期ということもあり、たくさんの新規登録がありました。本との新たな出会いが生まれています。

## お知らせ 事務局のメンバーが、新しくなりました。

8月6日よりNGO専門調査員として、近藤知子がメンバーになりました。NGO専門調査員とは、国際協力推進協会によるNGO強化のための支援制度です。また、10月20日付けで、小川直美がスタッフを退職しました。

 97年にASPB主催のラオス語講座を受講したことをきっかけに、ボランティアとしてイベント等に参加し、今回、日本とラオスの組織運営に携わることになりました。

ラオスとの関わりは、以前勤務していた会社でタイに駐在していた92年に、観光でラオスを訪れたことに始まります。メコン河を舟で渡った向こう岸に流れていた、ゆったりとした時間、静かな空気、穏やかな笑顔にすっかり魅せられてしまいました。

あれから9年、ラオスは今、グローバリゼーションの波を受けて日一日と変化しています。そんな中で、将来を担う子どもたちの健やかな成長を願う支援者・ボランティアの皆様方の思いを子どもたちに伝えていけるよう、努めていきたいと思ひます。よろしくご指導お願い致します。(近藤知子)

97年に初めてラオスと出会い、翌年、幸運にもASPBで仕事のチャンスをいただき転職。掛け値なしに忙しい3年5か月でした。楽しく働いてこれたのは、支援者・協力者のみなさん、ボランティア仲間、NGOのスタッフ仲間、そしてラオスの人々・子どもたちからいろんな力をもらったからです。コブチャイライライ。ほんとうにありがとうございました。さて、今後は「仕事」としてではなく「活動」として、自分なりにラオスの子どもたちへの支援に参加していきたいと思っています。またイベントなどでお会いしましょう。ポッカマイ!

(小川直美)

ポリカムサイCCCの子どもが描いてくれた私の顔 (1998.11)

